

|         |                                  |
|---------|----------------------------------|
| 氏名      | 東 博文                             |
| 学位の種類   | 医学博士                             |
| 学位授与番号  | 乙 第 595 号                        |
| 学位授与の日付 | 昭和 49 年 3 月 31 日                 |
| 学位授与の要件 | 博士の学位論文提出者<br>(学位規則第 5 条第 2 項該当) |
| 学位論文題目  | 頸椎症性脊髄傷害の発現機序に関する臨床的研究           |
| 論文審査委員  | 教授 児玉俊夫 教授 田中早苗 教授 高坂陸年          |

#### 学位論文内容の要旨

頸椎症に伴う神経合併症の 1 つである脊髄傷害の発現機序を解明する目的で、頸椎症患者の臨床的観察、第 5 頸椎椎管前後径および脳脊髄液の性状について検討し、脊髄傷害発現の機序について若干の考擦を行った。

検索対象は臨床的に Cervical spondylotic radiculopathy (28 例), Cervical spondylotic myeloradiculopathy (39 例), Cervical spondylotic myelopathy (3 例) と診断された 70 例で、24 才から 73 才、平均 47.1 才、男女比 50 対 20 である。

- 1) 臨床症状は上肢における神経根傷害と下肢における脊髄の long tracts sign (Myelopathy) に大別され、前者は全症例の 95.7% に、後者は 60% に観察された。臨床的に全症例を根傷害型 (Radiculopathy) と脊髄傷害型 (Myeloradiculopathy, Myelopathy) に 2 大別することが出来た。臨床経過は亜急性に発症し、半年以内に症状が固定したものが 51 例で、全患者の大部分をしめた。
- 2) 第 5 頸椎椎管前後径を測定し、正常例、根傷害型および脊髄傷害型との間で比較した。脊髄傷害型は正常例および根傷害型に対して、統計学的に有意に椎管の前後径の狭小があることが確かめられた。
- 3) 脊髄液検査では、クエッケンステッドテストの異常の率が脊髄傷害型が根傷害型にくらべて統計的に有意に高く、総蛋白量は脊髄傷害型と根傷害型との間に差異は認められなかった。髄液蛋白分画では  $\gamma$ -グロブリンの病的増加が双方の型に認められ、その程度は脊髄傷害型が根傷害型よりも大きかった。

以上の結果から頸椎症性脊髄傷害は、変形した椎骨の直接の機械的圧迫や、それに伴う血行障害による脊髄の損傷によるものではなく、脊椎の運動に伴う摩擦力が、脊髄やその周囲組織に外傷として作用し、その結果生じた限局性の炎症が主原因となって発現されるものであろうと推論した。

## 論文審査の結果の要旨

本研究は、頸椎症性脊髄傷害の発現機序に関する臨床的研究で、脊髄症状を呈する症例は頸椎脊椎管腔が正常人に比して狭く、また脊髄液で総蛋白質の増加と、さらにその分画で $\gamma$ -グロブリンの病的増加を認めた。この所見は屍体解剖例が本症の本体の究明に有力な資料を呈した価値ある業績であると認める。

よって、本研究者は医学博士の学位を得る資格があると認める。